

令和3年度 会派調査研究報告書

(視察先1箇所につき1枚)

会 派 名	新生会
事 業 名	若者の自立支援事業 認定 NPO 法人 侍学園スクオーラ・今人 上田本校
事 業 区 分	① 研究研修 ② 調 査

1 上田市での課題と研修・調査の目的

平成30年度の上田市の不登校児童・生徒数は、小学校で94人、中学校で180人の合計274人であった。274人の内、43人(15.7%)が中間教室に通い、全国平均12%は上回っているものの、中間教室にも通えずにいる児童生徒が8割を超えるのが実態であった。侍学園は令和元年度に視察した沖縄校を含め、若者の自立支援事業に定評があることから、不登校・ひきこもり支援について長岡理事長にご講演頂き、上田市における不登校児童・生徒への伴走型支援やひきこもり支援等をより実効性のある政策として提言するために現地調査を行った。

2 実施概要

実施日時	視察先	認定 NPO 法人侍学園スクオーラ・今人 上田本校
令和3年3月16日(火) 14:00~16:00	担当部局	侍学園 理事長 長岡秀貴氏

報告内容・感想(まとめ)・市政に活かせること

1 視察先の概要

- ① 設立趣意 基本的な「生きる力」を持ち得る人間の育成を通し、社会問題の解決を目指す。
- ② 心構え 根底に「命の継続」を、中心に「愛」を。→若者の自死ゼロを目指している。
- ③ 支援の特徴 「学校スタイルの支援」+「寮生活」
 - 「学校スタイル」…学校に対するネガティブイメージを払拭するため、教室での授業、朝・帰りの会、時間割、昼食、清掃、放課後等、学校と同様のスタイルとしている。
 - 「寮生活」…規則正しい生活習慣を手に入れ、衣食住の充実を図る(=新しい文化形成)。生活基盤を整えることで「成長欲求」が生まれることが期待できる。通学生と寮生とでは、ベーシックスキルの獲得に至るまでの成長速度(8ヶ月、2ヶ月)、同様に就労訓練移行(2年3ヶ月、1年6ヶ月)、就労及び一人暮らし移行(4年2ヶ月、2年8ヶ月)についても差が生じるが(寮生の方が成長速度は大きい)、原因としては①自己選択・自己決定の習慣化(家庭での干渉からの脱却等)、②コミュニケーション力、③就労意識形成の具体化(金銭感覚の正常化等)、④健康な心身の獲得、⑤ソーシャルスキルの向上(遊びや喜び、学園以外の人々との交流)、⑥妄想から納得へ(妄想的自己評価高位から現実的就業意識へ)

などが考えられる。サムガク卒業生の就労率は 100%で、卒業の条件は精神的自立と経済的自立（6ヶ月超の就労）だが、それを可能にしているのは寮生活を通じた合宿型支援による影響が大きい。

④ その他

○生き苦しむ、困り果てる人々は「状態」であって「疾患」ではない。誰でもなり得る可能性がある。

○社会参加不全に陥るプロセスは「経済的貧困」「社会的貧困」「文化的貧困」であり、人を疑わず、思考・習慣を疑う。

○不全に至るプロセスとしては、過去と原因にしがみつくと思考が成長を止める、自己肯定感が低いのではなく高いから傷つきやすい、過保護で子どもの心は壊れない・過干渉で子どもの心は簡単に歪む等が挙げられる。

2 行政委託事業「地域若者サポートステーション（サポステ）」から見える課題

① サポステ概要

2009年開設。働くことに悩みを抱えている15歳～39歳までの若者に対し、キャリア・コンサルタントなどによる専門的な相談、ビジネススキル講座などによるステップアップ、また就労体験などにより就労に向けた支援を行っている。2014年～2019年実績 登録者 1034名に対し就労決定者 579名、上田市の利用者 65.3%。

② 課題

単年度委託契約（複数年を見越した人材育成が困難）と、実績にカウントできない支援活動があること（若年無業者を対象としているために、学校に所属している、生活困窮者（まいさぼ）に登録している、仕事に就いている人は支援できない）。長い間、習慣の中から生み出された不全状態を抱えている若者の中には「ちょっと背中を押せば働ける者」はほとんどいない。不全の主な原因は「孤立」に起因したものであり、社会、家庭、職場、学校など様々な環境での孤立を防ぐ必要がある。

3 孤立を防ぎ「幸せに生きる」ためのセーフティプラットフォームの提案（概要）

誰もが共通して求める人生像は「幸せに生きる」ことであり、一方で「孤立」は、人間がつくる社会のコミュニティの中で最も問題の根幹になっている。

○学校内孤立…不登校、高校中退、若年無業、ひきこもり

○職場内孤立…職場内不和、入社不全、無業者、疾患罹患

○家庭内孤立…家庭内不和、不登校、DV、児童虐待

○社会内孤立…不登校、社会参加不全、疾患的孤立、障がいの孤立

これら孤立の入口は市民全員がゲートインする「学齢期（義務教育期間）」に存在するため、学齢期の子どもたちの不全サインを見逃さず、同時に切れ目のない支援の路線に乗せるセーフティプラットフォーム（SP）が必要。学校内孤立の初期サイン（遅刻・早退、不定愁訴、問題行動、保健室へのエスケープ、長期欠席等々）が確認された場合、小・中学校校長からSPへの報告を義務付ける。SPでは要支援生徒についてケース会議を行い、支援方針を学校・家庭へ提案。更に社会資源との連携が必要な場合は、行政や医療、民間団体との連携も踏まえた調整を行う。これにより、サポステでは年齢や所属等により支援対象外となっていた「本当に支援が必要な人々」へのアプローチが可能になる。また、SP以外にも、人材育成、雇用創出、就業支援、家庭支援等まで視野に入れた提案内容。

4 不登校児童生徒への支援のあり方について（通知） 令和元年10月25日 文部科学省

① 支援の視点

学校に登校するという結果のみを目標にするのではなく、社会的に自立することを目指す必要がある。
一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意する。

② 学校教育の意義・役割

学校関係者や家庭、必要に応じて関係機関が情報共有し、組織的・計画的な、個々の児童生徒に応じたきめ細やかな支援策を策定することや、社会的自立へ向けて進路の選択肢を広げる支援が重要。

③ 不登校の理由に応じた働きかけや関わりの重要性

不登校児童生徒が、主体的に社会的自立や学校復帰に向かうよう、その環境づくりのために適切な支援や働きかけを行う必要がある。

④ 家庭への支援

家庭と学校関係機関の連携を図ることが不可欠である。その際、保護者と課題意識を共有して一緒に取り組むという信頼関係をつくることや訪問型支援による保護者への支援等、保護者が気軽に相談できる体制を整えることが重要。

5 まとめ

① 3 提案について

市民全員がゲートインする学齢期の不全サインを見逃さず、同時に切れ目のない支援の路線に乗せるセーフティプラットフォーム（SP）の提案であり、現在は支援が行き届かない子どもたち及びその家庭を支援できる可能性があるため、関係部局で十分に検討されたい。

② 4 不登校児童生徒への支援のあり方（通知）について

上田市教育委員会に以下の事項を確認したい。

- ・ 民間教育施設等への出席扱いの指針はどうか。（参考）御代田町では侍学園など3つのNPO法人の連携による「うえだ子どもシネマクラブ」への参加を出席扱いとしている。
- ・ 家庭へのアプローチは適切に行われているのか。誰が、いつ、どのような支援を行っているのか。
- ・ 家庭内の状況や学校内孤立の初期サイン関わる情報把握、小中学校間での引き継ぎ状況など、どこまで整理されているのか。
- ・ 不全経験がある児童生徒が、中学卒業後、高校進学及び就労に向かう際に、どのように引き継ぎされているのか。



* 視察先の写真等がある場合は添付のこと